

中国残留日本人孤児から学んだこと(第9回)

## 「中国残留孤児」の呼称をめぐって

浅野慎一

※兵庫県AALA連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ(兵庫県版)』

2019年3月号掲載記事に若干加筆しました。

「残留孤児」や「残留日本人」には従来、さまざまな呼称があり、論争も多かった。1980年代には中曽根総理が「いい呼び名がないか」と呼びかけ、政界でも論争が起きた。「中国残留孤児」や「残留日本人」という呼称が日本社会に定着したのは、1981年以降と言われている。

筆者は、呼称をめぐる論争には、4つの論点が錯綜していると思っている。

第1は、日本政府の責任の明確化だ。たとえば「残留」という言葉が、日本政府による放置・棄民という意味合いを薄め、個々人が自分の意思で「残留」したかのような印象を与えるという批判がある。しかしその一方、「中国帰国者」などに比べ、「残留孤児」という呼称の方がその歴史や苦難、日本政府の責任を表現しているとの主張もある。日本政府の責任に基づく戦争の犠牲者という意味を強調して「戦争孤児」「戦争犠牲孤児」と呼ぶべきという意見もある。

第2は、日本のナショナリズムへの姿勢である。残留孤児が当然、日本に帰るべき「日本人」だと考える人々は「中国未帰還同胞」「中国帰国者」「中国引揚者」などの呼称を提唱した。逆に、「日本に帰るのが当然」といった日本側の一方的な見方に疑問を抱く人々は、「日系中国人」などの呼称を提案した。

第3は、複雑な事情や思いと結びついた字義の正確さである。中国人の養父母がいて、中には日本人実父母も判明した高齢の人々を「孤児」と呼ぶのはおかしいという意見は多い。すでに日本に帰国した人々を、いつまで「残留」者と呼ぶのかとの疑問もある。しかし他方で、幼少時に実父母と離死別し、その後も長らく日本に帰国できなかった耐え難い苦難を表現するには「残留」「孤児」という言葉がふさわしいと考える人もいる。「戦争孤児」や「戦争犠牲孤児」という言葉も、あまり正確とは言えない。戦争の犠牲として両親と死別・離別した孤児は、いわゆる残留孤児だけでなく、日本人・中国人の子供の中にもたくさんいたからだ。「日系中国人」という呼称も現在、残留孤児・残留日本人の多くが日本国籍の日本人であることをふまえれば、しっくりこない。

そして第4は、当事者や日本社会の受けとめ方である。たとえば、「残留孤児」という言葉が暗いイメージや差別の表象となっているから、もっとプラス・イメージを持ちやすい呼称に変えるべきとの意見もある。しかしその一方、国家賠償訴訟では、「残留孤児」という呼称は権利を求めて闘う主体の表象として用いられた。呼称に対する受けとめ方・感覚は時代によって、また個々人の中でも変化する。

なお「中国帰国者」という呼称は、残留孤児や残留日本人だけでなく、日本に定住した配偶者や子供・孫（二世・三世）を含む。逆に日本に帰国せず、中国に定住している残留孤児や残留日本人は含まない。また中国に生まれて日本に定住する中国籍の人々が、なぜ「帰国」者なのかといった疑問もある。さらに近年は、日本から中国に戻って仕事や生活をする二世・三世も増え、「中国帰国者」という言葉はますます混乱を招きやすくなっている。

ことほど左様に、「残留孤児」や「残留日本人」の呼称は複雑で難しい。

でも、よく考えてみると、最も複雑でわかりにくいのは、「残留」でも「孤児」でもなく、実は「日本人」という言葉なのだ。「日本人である」ということは、血統・国籍・出生地・定住地・言語や文化のいずれによって決まるのか。それらの要素がすべて「日本」でなければ「日本人」ではないとすれば、先祖に一人でも「日本人」以外の人がいれば、その人はたとえ日本国籍で、日本に出生・定住して日本語を母語としていても「日本人」ではないことになる。逆に、さまざまな要素の中で一つでも「日本」があれば「日本人」だと言うなら、ブラジルやアメリカに住む日系人、日本に定住する外国籍者は皆、「日本人」だ。法律的な国籍で決まると考えるなら、日本に国籍法ができた明治32年以前に「日本人」はいなかったことになる。古代の日本列島には「大和」や「出雲」や「熊襲」や「蝦夷」がいたが、いつ、どのようにして、その人々は「日本人」になったのか。北海道にはアイヌという先住民がいるし、沖縄はかつて「琉球王国」として独自の国家体制を維持していた。戦前の日本は多民族帝国であり、植民地支配下にあった朝鮮や台湾の人々は「大日本帝国臣民」だった。

このように、「ここは日本だ」とか「我々は日本人だ」という意識は、それほどクッキリとした定義や境界線で成り立っているわけではない。本当に曖昧なのは、「残留孤児」の定義ではなく、「日本人」の定義なのだ。残留孤児が「自分は何人なのか」と思い悩むのはむしろ真っ当である。本当に自分のことを知らないのは、「自分は正真正銘の日本人だ」と思い込んで何の疑問も抱かず暮らしている圧倒的多数の日本人の方である。